

書房
アン
テク
ス

歌集
乙
津
川

田
辺
哲
司

歌
集
乙
津
川

田
边
誓
司

目次

転職	七
父の死	一三
煙突	二三
乙津川	二九
未来	三四
故郷両子	四二
白花木槿	四七
ベクトル	五九
久住登山	六七
さみだれ	七
望郷	七三
白き段差	八一
介護を学ぶ	八五

かぼすの花

内省

未明のしじま

あとがき

八九

九三

九八

一六

転
職

萌えいでし山の若葉に傷みたる心の癒えし日
々われにあり

吹く風を受けとめんとぞさみだれの上りし庭
にいでて佇む

十日後に転職となるわれにして修羅の名残の
ごとく安けし

ひさびさに降る夜の雨人為なき音はさながら
こころを洗ふ

悩みたる職を退き帰り来て居間にしばらく茫
然とをり

賜りし任務のおもたまはりし善意の重みた
だかたじけな

朝顔の咲きつぐ花を日々愛でて過ぎし挫折を
いまは思はず

懐かしき写真の顔にまもらるる如くにいこふ
生家の部屋に

水たぎつふるさとの川魂をやすらはしむるも
の四方に満つ

縁側の土に音なくいとなめる蟻地獄いくつむ
かしも今も

ひたぶるにわれら踊るは逝きましし人らの霊
を弔はんため

この日ごろ心確かにおもひをり老いし人らに
救はれてゐる

心底をむしばみをりし元凶の除かれしいまお
ほどかに居り

憎しみはいつか霧消しつつましき人間として
けふも働く

水死とふ忌まはしき記事四十九歳の過信あは
れに推測せしむ

夕風の生ぬるくふく波止場にて蛸壺あまたと
もに暮れゆく

南限に棲む海猫とわれの知る海猫にしておほ
どかに飛ぶ

やすらかに人のいのちはあるべしと祈りて老人の介護に務む

薄あをく暮れんとぞする街空に煙突一基けむり噴きをり

父の死

枯枝のごとくほそりし父の脚いのちはかくも
厳しきものか

大げさに魚籠見しむるは病み臥せる父の生氣
を促さんため

ふるさとの山青あをと今もありわが存在はこ
こにし根ざす

たつぷりと山の空気を吸ひしゆゑ潜みをりたる
積極の湧く

とろろ汁食ひつつおもふ身に降りし一つの危
機を辛うじて越ゆ

道のべにこの世のものとなき紅を放つ曼珠沙
華ゆゑなく寂し

人々のおほかたは欲る金銭に疎く居る身をう
べなふわれは

淡泊といはば言ふべく熱血といはば言ふべく
己は生きん

自らに克つといふこと具体なき意志の内にて
もて余しぬき

今に言ふ氣象予報士になれぬまま父老い
にけり言失ひて

声かくればああとぞ言ひて涙ぐむ父はかくま
で老いて病み臥す

帰り来しわれを見上ぐる金魚一尾かかる命の
交流もあり

つつましく父は逝きたり語を失ひその四肢枯
枝の如くになりて

海村に生れたる父はいつしかに海を忘れてこ
の家に逝く

茫茫と時は過ぎしかわが前にみ骨となりし父
横たはる

この父のありてわが在る当然がみまかりし時
脳裡にうかぶ

癌除りしことを知らずに逝かれしか安らけき
顔しばしみつむる

稲刈りし後に鎌にてかたはらの柿をとりくれ
し父をおもひき

易々と逆立ちに歩む父にして幼きわれはそれを誇りき

さながらに起死回生を実証し父は半生を浄く
生きたり

命在りし時すぎしかど亡骸は亡骸としてその
時をもつ

人は死ぬものぞとわれに言ふごとく父は逝き
たり抗ひもなく

煙突

傾向の中にて揺らぐわが心生のはかなさは奥
底にあり

生き急ぐわが性分を戯れに豚の如しと言ひて
寂しむ

しんしんと夜の静寂の身にしみて臥床にをれ
ば遠き風音

暇なき明暮にしてゆきずりの並木の冬芽われ
を和ます

枯山に日は暖かに照りみたり古里したし草木
も土も

夜の闇にくぐもる如き音きこえ冬の火花が遠
くに上がる

ふるさとの近隣さびし数軒の独居世帯と廃屋
ひとつ

風ふけばさながら風となりつるかわれの心の
かかる揺らぎも

まづしくも白く咲きぬし茶の花をいまは見か
けずこの古里に

立ち枯るる葦生が昼の日に照りて川の流のか
くもしたしき

押し寄する寒気の重さ感じつつ夜は更けをり
否応もなく

大寒の夜の寂しさは限りなし臥床に点る電灯
ひとつ

鶴崎の町したしけれあかつきの空に煙突のけ
むりが上がる

ひと頃は都市の象徴たりしもの煙突けさもけ
むり噴きをり

たは易く経済をいふ学者らの自家撞着はいま
だにつづく

戦争をシーソーに譬へし英人の思想はまさに
いまの時代か

寛容のなき宗教者世に満ちてわが身辺のこと
にも及ぶ

一塊の土くれのごと眠りしに風邪の癒えたる
躰はかるし

青空に機体燃えつつ落ち来るコロナ号あ
はれ人智もあはれ
コロナ号事故

燃え尽きて機体も人もかたちなし草原にただ
黒き焼痕

あかつきの空気はいまだ寒けれど海の上なる
遠空ひかる

辛うじて食をつなげば他を欲らず清貧にして
心やすけし

乙津川

暮れなづむ乙津の川の干潟みえ汐のひきたる
後のしづけさ

すがすがと乙津の川に水流れわがたまゆらの
安らひを生む

れんげ田にかつてはしやぎし娘にていま黙々と新聞を読む

一週間たちまち過ぐる生活のありがたくして家にくつろぐ

ふるさとに蝌蚪生るる日も近からん未明の床に雨音およぶ

人來り人去りゆかんものとしぞおもへば寂し
如月の雨

生くること日々ありがたし小春の日の暖かき
乙津川原

水底にあをぐるき藻の生ふる見え乙津の川は
冬の安けさ

昨日ありし干潟けふなくこの川に潮の及ぶこ
とすがすがし

干満のありて潮の及びたる乙津川すがし朝の
日に照る

乙津なる川のほとりのくさはらに湿れる朱の
曼珠沙華さく

子を育て来し老人の皺を見つ手に刻まれしお
もき年月

朝夕となく老人とともにゐるときに客観する
ところに気付く

たまゆらの漣に日の照り反す乙津の川のほと
りを歩む

未来

枕元に書物おもふまま積みおきて疲れぬたれば
早々と寝る

全体の奉仕者たれと梅苗はわれを戒むる如く
茂りつ

一本のみちわれにあり生といふ浄き深化を求めゆくもの

未明にてわが覚めをれば風音にまじりて鴉鳴く声きこゆ

日すがらに疲れぬたれば悲しみに心かたむく如くぬたりき

春霖といふ雨さむく降る日にて過ぎし挫折を
いまは嘆かず

差別せしこと悔やまるる遠き日に韓国の人ら
村を去りたり

とめどなき悲歡離合の内にあり術なきわれは
時過ぐすのみ

頑なな心ほぐるる一時や老づくわれがキヤラ
メルを食ふ

咲きそめし椿の花のくれなゐに心をさらす如
く佇む

善悪を包摂せるを神といふ理論用なく現に生
くる

操られぬるとき衆一様に拳かかぐる映像が
なし

精神の支配解かれし人々がまづ略奪に走れる
あはれ

バグダード陥落

ゆくりなくわが思ひいづ模擬戦争にて融和を
保つ裸族ありとぞ

幻のごとくに過ぎし諸々はやがて意味なく消えてゆくべし

弁舌の滑らかさのみ政治家はいまだに深き倫理を言はず

杳々としたる未来をなほも追ふ心もとなくあれどなほ追ふ

をりをりにわれの未来を思ふとき結論のなき
安けさのあり

篠竹のたけのこ生ふる頃ならん周期のごとく
古里おもふ

風光る頃としぞいふ五月にて町並したしわが
歩みゆく

庭なかの空木の 一木ことしまた花咲きそめて
日すがら匂ふ

独善を敷衍するがに宗徒らはみづから報復の
原理をかかく

しづやかに夜の雨ふる音のして臥床にをれば
心澄みゆく

故郷両子

わが生れし家とふ辺りたださまに藪とぞなり
て数珠玉稔る

ゆきゆけば山藤のはな咲くみえて泪ぐましも
わが生れし村

道ばたの万屋にて豆腐一つ買ふこの谷のみに
売れわたる物

手にとりし龍の玉いくつ青あをと初冬の朝の
光を反す

黄にあふれ菜の花の咲く川端にわが生れしと
ぞその家知らず

ふるさとの庭に帰_りて苔の香をふくむ山氣の
なかに佇む

道のべに数珠玉くろく稔りをり立冬まへの村
のしづかさ

喜寿にして健かなる母電動のカートに乗りて
畑へいでゆく

古里のもみづる山にしたしみて昼静かなるみ
ち帰り来つ

萌えいでし春路を摘むわが祖母のかつて耕し
畑は野となり

ふるさとの野にて摘みたる羊蹄を食めば過ぎ
たる日々甦る

ぎしぎしのほのかに酸ゆき味にして貧しかり
にし過去が顕つ

空をゆく雲あふぎ見し記憶あり老づきしかば
しばしばおもふ

少年はたちまち老いてこの日頃川に遊びし日
を懐かしむ

久びさにしてわが仰ぐ両子嶺は若葉の色とな
りて恋ほしも

白花木槿

自らのためとおもひて懇ろに作られし物世に
見あたらず

ゆき行けど黄なる大地の続きぬし夢より覚め
てさみだれの音

剽軽といはば言ふべくわれの飼ふ金魚をりを
り逆しまに浮く

わがおもふ「万象無所徒」道のべに生ふる草
らに親しみてゆく

老人とおなじき時を過ぐすこと喜びとしてけ
ふも勤むる

夜ふけて雨降りはじめ何がなし入梅前のころ
の寂しさ

サイダーを舌にからませ飲みしかば貧しかり
にし思出が顯つ

生くるものなべて安けく眠りぬん午前二時梅
雨の静まりし時

この日頃風ふく音をわが聞かず人造の音街に
あふるる

当然にして一匹の蚊を潰す生命に差異なしと
は言へず

ひとしきり蝸の鳴き暮れしかば灯りのもとに
麦飯を食ふ

褒めやればやすけく眠る飼犬のかくも老いた
り頬の弛みて

憂ひごとなき一日にて夕づきし庭にことしの
法師蝉鳴く

ふるさとはタベ蝸の鳴きをらんをりふしおも
ひ街に働く

つつましき日々の暮らしにあるときは木槿の
白き花をあはれむ

暑からぬ夏の一日はたちまちに暮れて寂しも
臥床に黙す

もろもろに心揺れつつこの夏も早逝かんとす
海夕暮れて

辛うじて暑さ戻りし一日にて暮れゆく海を見
つつ帰り来

炎熱のすさまじければ昼に鳴く蝉多からずけ
ふも暮れたり

ときをりは雷とどろきて雨の降る夜の更にし
て心ざびしき

やうやくに音しづまりし夜の雨われの心を空
しからしむ

ことし早黄月忌すぎいづこにも白花木槿すが
すがと咲く

浴室にて娘と妻の語らひをり快活なるこゑ穩
やかなる声

百日紅のときながく咲く枝先にからだ震はせ
熊蟬が鳴く

検束のなき夜の時を過ごしつつ臥処にひとり
未来をおもふ

めくるめく世の移ろひに疎くゐていつか故郷
に住まんとおもふ

しづかなる昼過にして道のべの鳳仙花また実
のはぢけたり

糸ひ醒めの重き眼に明けてゆく海のなぎさに
寄る波がみゆ

悶々とせし日々過ぎて老人とともに生きつつ
心救はる

せせらぎの音はいまだもわが内にありてをり
ふし古里を恋ふ

いくばくか豆の焦げたる芳しさ好みて今朝も
珈琲をのむ

祈るがにみゆる里芋の黄の花を一本生けて人
を偲びつ

降りそめし秋のしぐれの音ぞするかくて彼岸
会の一日過ぎゆく

寂静といはば言ふべく亡骸となりたる人が柩
に眠る

新貝施設長ご逝去

明日からは又いきいきと勤めんと残りしわれ
らしばし祈りつ

薬効を信じてコーラ飲みをりし祖母逝きては
や八年が経つ

ベクトル

の
あはれ
衰老に導くものを未だ知らず沈黙したる臓器

地球規模にて食生活の変はりゆくこと寂しけれ
珈琲の味

実感のなき現実をわが見をり化石資源に都市
うごくさま

受験ちかき娘の寝ぬる頃にして窓の外なる闇
のしづけさ

ベクトルといふ語にし似ておのおのは自ら生
くる方向をもつ

わが吹かすたばこの煙消ゆるときエントロピー
の増大おもふ

しぐれ降る音さびしけれ病みをりし父逝きて
より一年が経つ

未明にて降る寒しぐれおもむろに草木は枯れ
ん来ん春のため

生産の象徴にして煙突は風なくけむり高くふ
きをり

水鳥の命あはれや黙々と生くるがゆゑの餌を
あさりをり

役人といふ肩書を棄てしゆゑ心のかるく街を
歩める

頭撫づれば顔のやさしくわれを見る飼犬にし
て心のかよふ

大人への課程とおもへど受験期となりたる娘
この頃黙す

春一番といふ風一日吹き荒れて思ひまとまら
ず勤を終へつ

青春をとほく遠くに逝かしむることくに三月
の雪降りしきる

父われの挫折をいく度見しならんをとめごよ
ゆめ躓くなかれ

たまきはる命恋ほしみ今宵のむ一合の酒身に
しみわたる

風音もなき未明にてほのぼのと灯火を点しも
の思ひをり

今宵また湯たんぽを抱き寝ねんとすわが見出
だしし幸ひ一つ

公務員の異動内示が重要と言はんばかりに新
聞に載る

泥遊びせし日のとほくをとめごは数日にして
家出でんとす

ある時は東京に住み華やぎを身にあみたりし
ことも幻

去りてゆく人あり来る人もあり悲歡離合のう
ちに老づく

久住登山

まなさきに寥々として山笹とすすきの平あさ
の日に照る

岩がちのみち辛うじて辿り来ていまし久住の
山頂に立つ

根子岳の山巒するどく眼前にそびえてくろし
初冬の空に

祖母山も傾山もちかく見えくじゆう山頂に昼
酒をのむ

高山の道のかたはらに日もすがら融けぬ霜柱
しろく光れる

山下りし体湯泉にしづむるに一日の疲れたち
まち癒ゆる

さみだれ

友情といふ語なつかし怖れなく働きをりし日
々しおもほゆ

予想だにせざりしバイパス道路竣る古里はな
ほ貧しけれども

いくばくか心の制御崩れつつみづからのこと
言ひつつ空し

さみだれの音する夜は寂しけれ過去をとむら
ふ如きその音

知らぬ間に夏風邪を引きぬし躰鉛のごとき
日が過ぐる

雨催ひせる夜の更のしづけさに未来をおもふ
部屋にこもりて

さみだれの音する午後は何がなし電車に乗り
て旅に出でたし

曖昧に了解しつつ日常は過ぎゆくものとおも
へばむなし

つつましく一生はあらかな空梅雨の日にさきが
けて露草がさく

いましわが生きてこそあれこの後の存在すら
や言ふ根拠なく

望郷

権威にぞすがり維持するマスコミが既成概念
の文化を語る

知識とは器に過ぎぬことを知るその中身にて
日々に迷へば

友来り友去りゆきし現実のかかる事実は事実
たるのみ

平凡に生きてあらんと希ふのみかかる生きざ
まを祖母に学びき

死の灰を怖れし日あり大水のいでし年昭和三
十九年

雨蛙いつしか鳴かずなりゐたり炎暑はかくも
厳しかりしか

死ぬことに鈍くなるとぞ戦場の異常さを言ふ
旧兵卒は

遠くとほく歩み来りぬふるさとの川に遊びし
過去は幻

いつしかに子らの育ちていでゆきし家広々と
風の入りくる

乙津川の水面の上の蜻蛉らは水に触れつつ去
るとしもなし

ふるさとの村を棄てしとおもふ時涙いでここ
ろ均衡に向く

農家にて生れしおのれのさいはひを日々に思
ふもわが老づくか

記憶なる過去と期待の未来などいまわが内に
混沌とあり

良き酒を少しく飲みていこへればわが幸ひは
かくもつつまし

懐かしき空気の匂ただよへり山際の田の稲刈
りし午後

小さな躰を農に酷使せし母は健かに老いて
いますも

山あひの両子に生れ育ちたる日々遙かにて街
に老づく

をりふしに思出に顯つ両子嶺はわが心底に雄
々しくそびゆ

夜の更に一つの思ひつゝのるときしぐれの音の
寂しくきこゆ

人みなをいとほしまんと独りごつ晩秋の夜の
寂しいき臥床

立冬のあした静けく宿酔のおもたき体起こさ
んとする

イオンにて均衡をとるわが身かと宿酔にして
飲む水うまし

白き段差

永遠に超え得ぬ定めありやなし人は異質の人
を許すか

自由といふ思想あまねく世に満ちて自らの非
を問ふ人あらず

先生の亡くなりしこと今し知る何なすべきぞ
けふよりわれは

蛇崩のみちをあゆみて先生の許へ通ひし日々
が茫々

竹を割る如き言葉に上京せしわれの仕事を気
遣ひくれし

かくあまた儂き歌を詠み並べ揺らぐ心を鎮め
つつぬき

青空にそびゆる大き公孫樹の木戦禍を越えて
宮居に残る

十五万の人々呑みし津波ありテレビにまざまざと見つつ慄く

まのあたり白き段差の波の壁みえて忽ち陸地に迫る

年毎に異種のウイルス流行るなど何か狂ひし世界とおもふ

介護を学ぶ

ヘルパーの学生となり放課後に少しとまどひ
拭き掃除する

わが内に自尊の意識あるを知り福祉にたがふ
ゆゑにとまどふ

福祉とぞ言葉に言ふも生活の糧なる事実避くるあたはず

陰洗といふ介護あり契約の次元を超えし信頼に立つ

車椅子介護に出でて巡る街冬のなごりの雪降りしきる

バリアフリーの成りし駅前公園に車椅子押し
階段上る

身におもき介護福祉の体験が残像として脳裡
をめぐる

われらいまいかなるケアを供すべき発芽前な
る種子のごとしも

袖の中へ腕を通す介助さへなかなか難しくわれ
を悩ます

家人にて施し得ざる機械浴うつつの事情ここ
に極まる

如何ともわがなし難き現実の介護現場にただ
立ちつくす

かぼすの花

春さむき日々は過ぎつつわが内に解決し得ぬ
ものを保てる

日すがらに部屋ごもりぬて時潰す無為は即ち
意を解き放つ

つつましく命生きんか競ひあふことを好まぬ
性分われは

若きらと働くわれはしらず知らず老いたる者
としてものを言ふ

娘より家に戻りしとメール着くかかる道具に
意志の伝はる

この日頃わがなし得べき限界を感じし後に心のふさぐ

唐突にふるさとの母おもひいづ今は頼まん事とてもなく

反骨の氣にゆがみたるわが顔を和らげんとす茨さく道に

いくばくか体弱りてをりをりに荨麻疹いづ家
にいこふも

甘き香のするとし見れば庭なかのかほすの—
木花あまた咲く

夥しく咲きたるかほす花散りて庭はいまだに
つよき香のする

梅雨晴の午過にして海べりの別府の奥の山脈
がみゆ

内省

県といふ組織をいでてわがおもふ県に恃むと
いふものあらず

空梅雨といふにかあらん街ゆけば木々の青葉
がわきて輝く

脳裡にて渦巻けるものおもむろに黒き悪魔の
ごとく膨らむ

ゆき行けど灯のみえぬ道のごと未来は過去を
ともなひ来る

台風の遠ぞきゆきし午過に青すさまじき空の
下ゆく

荒れなんとする田園はわが内の憧憬にして既
にいま無し

ひとつもとの薔薇を手折りて渡さんか愚直のわ
れを棄てざりし君

風音のなき一時に覚めたり未明の頃はさな
がら孤独

否応のなくわが内につのるもの鎮まりゆかん
ことを待つのみ

腰部手術を終へて自己血を輸血せるたらちね
の母その顔老いて

梅雨明けし街のすがし草匂ひ鋪道がにほふ
日の猛るなか

おもむろに老づくわれは朝毎に爪先立ちをみ
づからに課す

隠遁といふも親しくをりをりに漢詩を詠みて
心遊ばす

未明のしじま

一合の酒さへあれば満ち足らひ俗人われが生
を愉しむ

みえみえの野心疎ましく堪へぬし心弾けて一
喝したり

人に言ひ同意を得んかなどおもふほとほとわ
れは孤独に弱し

唐突に油蟬ひとつ鳴きて息む未明のしじまい
たく寂しも

行く道に木草のいきれ立ちこめて炎天むなし
疲れし吾に

自他の間に無明のゆゑの差別あり往々にして
人ら気づかず

若かりし日より誠を追ひ求めいまだに知らず
誠の意味を

常々に世に尽くさんと生きをれど何成し得べ
きわれかを知らず

庭なかの梅はおどろに影をなし古りし三十年
の歲月まとふ

落胆せしこといくたびも過去にありその消極
を越えて来りぬ

葛の花咲きそめにけん古里に老いてまします
母のおもほゆ

一つひとつ越えてゆく事わが前に起こり来り
て只越ゆるのみ

庭なかに実るかぼすを清しみて玉の緑を今朝
もたたふる

台風にあらがひをりし雀らは辛うじて笹群に
入りゆきたり

昨日ありし友いまは亡くたは易く申ふ言葉な
ぞ見つからず

わが職場を訪ねくれしが永遠の別離の時とつ
ゆ知らざりき

木犀の花散りしきて深みゆく秋の思ひを友に
し告げん

先生にまみえしことのなけれども未明夢に顕
ちしばし語らふ

アレルギーありて安静を保つ日々ほとほとこ
の身扱ひがたし

遠どほに海のとよもす音きこえ夜の臥床に秋
暮れんとす

いつしかに子ら成長しいでゆきし家静かにて
雨だれの音

をやみなき雨の波動は底ふかきわれの心に入
りてしづもる

あとがき

本集は、「菜花爛漫」、「聴風」に次ぐ私の第三歌集であり、平成十四年から平成十七年にかけての作、二百八十余首を収めた。この時期は、私が県庁を早期退職し、新たな職場、介護老人保健施設大分豊寿苑で働き始めた時期に当たる。

こうしてまとめみると、作品は、身近な囁目に限られていて、作歌力の飛躍の無さに落胆せざるを得ない。

しかし、思い返せば公務員転職後の生活は壮絶であり、それを癒しながら歌に遊んだこと自体懐かしくかつ貴重な人生経験だと思っている。

歌集名を「乙津川」としたのは、新たな人生を与えてくれた大分豊寿苑に謝意を表す意から、その近くに流れている川の名を命名したのである。

歩道に入門して既に二十六年、短歌に進歩は少ないものの、写生短歌への信念はいささかも揺らいでいない。この間、父が他界し、昨年は佐藤志満主宰がお亡くなりになって悲しくてたまらないが、今後も先生の教えを守り、少しでも恩返ししていきたいと思う。

この機会に、これまで何かと心配をかけながら私を支えてくれた妻に心から感謝の意を表し、この一冊を捧げたいと思う。

平成二十三年九月一日

田辺誓司

書房アンテクス理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は生産より消費へ不易より流行への歩を速めてまいりました。そして、時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマンあふれる社会の構築を高く掲げた書房アンテクスを弊社内に興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげよとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

二 一 一 年 六 月

代表社員 田邊誓司

著者略歴

田辺誓司（俳号：風信子）

【略年譜】

- 1952年 大分県国東市安岐町両子に生れる。
- 1975年 長崎県立国際経済大学（現長崎県立大学）卒業。
- 1982年 俳句を始め現在に至る。
- 1985年 歩道短歌会入会。
- 2009年 現代歌人協会会員。

【著書】

- 句集「草笛」（近代文芸社・日本俳人文庫22集）
- 歌集「菜花爛漫」（短歌新聞社）
- 随想「風立つ村」（れんけい社）
- 写生短歌研究「存在価値固定詳論」（聴風舎）
- 句集「帰郷」（聴風舎）
- 歌集「聴風」（聴風舎・第2歌集）
- 句集「草笛」（書房アンテクス・第2刷）
- 歌集「乙津川」（書房アンテクス・第3歌集）

歌集 乙津川

平成23年9月1日発行

著者 田辺誓司

発行者 河野昭治

製作所 書房アンテクス

発行所 会社・国際化支援事業所アンテクス（同）

〒192-0907東京都八王子市長沼町178番地42

電話（097）536-0260

e1000（税込み）